

ドレスデンの「日本宮殿」

—— 18世紀ヨーロッパにおける東洋への熱狂 ——

コルドウラ・ビショッフ／住田翔子（訳）

ドレスデンは、現在のザクセン州州都かつ政庁所在地で、ドイツのいずれの都市よりも王室居留地として古くから恩恵を受けている。戦争による破壊にもかかわらず、500年の歴史をもつ芸術と建築で今日の都市風景が形作られている。このような狭い地域にこれほど多くの優れた芸術作品が集う場所は、ここドレスデン以外ドイツのどこにもないだろう。そしてこの集積は、ドレスデン王宮の連綿として高まりゆく重要性和ザクセン・ヴェッティン家時代の権力獲得のたまものである。

ドイツの神聖ローマ帝国は大小350以上の領地の集まりだった。50人から100人の有力諸侯たちは、その地位を維持しようと絶えず争いに身を砕いた¹⁾。1547年、ザクセン公モーリッツ(1521 - 1553)が選帝侯を宣告された。そのためザクセンは最高位の諸侯である7選帝侯—18世紀には9選帝侯—として政治的に巨大な意義を得る。彼らはローマ=ドイツ王を選定し、皇帝最奥の諮問機関として奉仕した。ザクセンおよびプファルツの選帝侯は皇帝不在の時代において皇帝を代理する権限を委任された。

同じく16世紀にザクセンは、銀採掘業によってドイツの最も富裕な準州のひとつとなった²⁾。17世紀後半には、ザクセンの王宮はヨーロッパで最も重要な王宮のひとつに数えられるまでになった。政治的権力の絶頂は、アウグスト強王と呼ばれる、フリードリヒ・アウグスト1世のもとで訪れた。アウグスト1世は選帝侯であると同時に軍事的に皇帝を代理する侍従武官長であり、1697年にはポーランド王に選定された。さらなる名声の高まりを促したのが次の二つの出来事である。1711年の神聖ローマ帝国皇帝ヨーゼフ1世の死後、アウグスト1世は皇帝を代理する地位を得たが、この出来事は彼が皇帝の責任を一時的に担ったことを意味している。さらに1719年にアウグストは、息子を皇帝の娘マリア=ヨーゼファと結婚させることによって、皇室との親密なつながりを画策した。

選帝侯という傑出した地位とそれ以上に露出の多い王の任務は、これら名誉の称号の視覚化を求めた。第1に、アウグストはドイツ諸侯のヒエラルキーにおいて自身の地位を著名にしなければならなかった。第2に、彼は文化的に先進的な国際的王宮の水準に達する、あるいは超えるべく努めた。名誉の象徴に要する支出の指標は、芸術や建築における「壮麗」や「壮大」という可視性であり、たとえば建物の大きさ、近代的な新しさ、精巧かつ豪華な素材の使用、絵画や芸術収集の大規模さ、異国情緒ある珍しい文物の所有や特定の事物の専有などが挙げられる。これによって1710年から1720年の間に、邸宅の設計・建設およびその近代的な体系化が途方もなく高まった。

これら格式高い建物のひとつ、いわゆるドレスデンの日本宮殿【図1】を次に見ていこう³⁾。ヨーロッパのみならずアジア製の磁器製品5万点から6万点とともに、アウグスト強王は1730年頃



図1 ドレスデンの日本宮殿

出典：X-Weinzar [CC BY-SA 2.5 (<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/2.5>)], from Wikimedia Commons

にヨーロッパ最大級の磁器コレクションを構築した。コレクション収容施設を作るために、アウグストは特別仕様の宮殿を建てるが、それは磁器を展示するために設計または建てられたかつてないほど大きな建物だった。

アウグストは1717年に、その2年前に建てられたフランス様式の小さな夏の離宮を購入した。この宮殿は、東洋の磁器とともにオランダ様式で設えられるよう意図されたものだったために「オランダ宮殿」と呼ばれた。オランダ宮殿は、エルベ川対岸の居住用宮殿の向かい側に位置している。当初より空間を構成する一部として磁器コレクションおよびアジアの芸術品を展示するという、アジア様式による室内装飾の計画が目論まれていた。

1階の9部屋および2階の9部屋は、ヨーロッパの壁飾りや銀製の調度品、フランスの鏡、東アジアの図柄を模したシノワズリーの絵画や羽目板の混交というシノワズリー様式で主に家具が備え付けられ、あわせて極東製の磁器や漆器が飾られた。新しかったのは、特定の磁器コレクションに適するように各部屋をそれぞれ異なる色彩で飾るという構想だった。

1719年の息子である王子と皇帝の娘との婚姻において、主要な祭典のひとつがこの宮殿で開催された。1719年9月10日開催の太陽神アポロまたはソルの祭典で、高価な花火を用いて祝賀された。すでに1719年にはこの宮殿は「日本宮殿」とも呼ばれ始めていたが、それについては後述する。

1722年以降、絶えず変化する膨大な建築計画が作られた。建物の拡張は主に1727年から1733年の間に実現したが、その後1750年代まで長引いた。宮殿は決して完全には完成しなかった。今日私たちが目にする建物は四翼からなる城【図2】で、新しく建造された市の区画「新しき王都」の中核を成している。部屋数は2倍の35部屋となった。2階は王を象徴するフロアとして、ギャラリー、接見室、謁見用の寝室とチャペルすべてがヨーロッパのマイセン磁器で飾られた。アジアの磁器は1階の部屋に置かれた。機能面では宮殿はなおも遊興の宮殿だが、装飾・設備面では第2の公邸により類似している。

1733年2月のアウグスト強王の逝去は建築計画の分岐点を印した。彼の息子フリードリヒ・

ドレスデンの「日本宮殿」(ビショップフ)



図2 日本宮殿の建物

出典：Creative Commons: BY-SA 4.0, <https://www.pictokon.net/bilder/ausflugsziele-sachsen-2015/1055-japanisches-palais-museum-fuer-voelkerkunde-in-dresden-201206.html>

アウグスト2世またはポーランド王アウグスト3世(1696 - 1763)は父の要請通り建設を続けたものの、計画は著しく簡素化された。上述した室内装飾のすべてが関心の低下と資金不足に陥り、7年戦争(1756 - 1763)の終わりによって最終的な計画中止を告げられた。その後磁器のための宮殿という着想は消滅した。代わりに彫刻コレクションおよび王立図書館が設置され、1785年ついに最初の美術館が開館した。

オランダ宮殿の取得・再建時点において、磁器の大規模な収集にはすでに70年の伝統があった。17世紀半ばに始まり、オランダ・オラニエ家の女性たちによって主導されながら、シノワズリー様式の小さな陳列室が登場した⁴⁾。アジア風の室内装飾は、東アジアの磁器類の展示に適した構成だった。アジア製の輸入品およびアジア風の模造品—特に漆器と織物—を用い、鏡を取り付けたことで、きわめて壮麗で異国風な空間という印象が作り出された。「Indianse Cabinet (インドの陳列室)」と呼ばれるこうした部屋で東洋の磁器を展示するという着想は、オランダ北部で発展した。【図3】17世紀に必要なとされ輸入された製品はほとんどがホラント州を介して売買され、同様に中国磁器の安い複製品や地方のファイアンス陶器もホラント州で生産された。

1685年以前のドイツの城内に作られたシノワズリー様式の陳列室すべては、その女性パトロンたちがオランダ・オラニエ家との関係に影響を受けたことから、オランダの図柄を基礎とした⁵⁾。

今は失われたが1654年頃ハウステンボスに作られた陶器の部屋は、オランダ総督フレデリック・ヘンドリック(1584 - 1687)の妻、アマーリエ・フォン・ゾルムス＝ブラウンフェルス(1602 - 1675)によって作られた。この部屋は、最初期の磁器専用の部屋あるいはアジアの陳列室とみなされるが、壁の覆いや家具、磁器すべてがアジア様式によるもので、そのために一体化された全体が形作られた。アマーリエの4人の娘たちはみなドイツの君主と結婚した。彼女たちは、

アマリエの孫であるオラニエ公ウイレム3世の妻メアリー・ステュアート2世同様に、アマリエを手本にしながらオランダやドイツ、イギリスの夏の宮殿の多くに磁器の部屋を設けた。17世紀の間に、磁器や陶器で飾られたほかのタイプの部屋が現れた。大広間の一部であるシノワズリー様式の陳列室のみならず、大厨房、大寝室、磁器で飾られた岩屋や夏の食堂もあった。

このような部屋の壁は通常「オランダ流」に装飾された。オランダで製造された青と白のデルフト焼きのタイルが並べられた壁は、磁器の陳列室同様にすぐさま宮殿に欠かせない存在となった。【図4】アジアの製品が増加すると、明らかに、部屋や建物の翼部あるいは城全体にさえもアジア様式によって一貫した連続性をもたせようとするのが頻繁となった。

1700年頃までに、これらすべての磁器の部屋は女性を意味するようになった。ほとんどすべての部屋が、女性によってあるいは女性のために作られた

ためだ。17世紀から18世紀の間、室内デザインは女性の領域とみなされ、君主たちの統治任務を補完するように、君主の妻たちは、政治的かつ王朝の関心を表象する室内を、ヨーロッパのすべての王宮で注目されるように作り上げた。宮殿での儀式によって、女性たちの作り上げた大広間は宮廷社会の広い社交界に入りやすくするコミュニケーション空間であると定められた。外交官と訪問者を受け入れ食事を供し王宮の余興を催すのが通常この部屋だったため、最も絢爛かつ当世風に高貴な身分を象徴するもので妃たちの部屋を整える必要があった。

40年のうちに、磁器の陳列室はそれぞれの妃の大広間に欠かせない要素にまでなり、最も高貴で人目をひく王宮の部屋とみなされた。特に18世紀初めの20年間に磁器の陳列室が広く普及し、次第に磁器の陳列室は女性性を失った。1690年以降徐々に男性が彼ら自身の磁器の陳列室を設えはじめるものの、少なくともフランスとイングランドでは中国様式は「男らしくない」という批判を受けた⁶⁾。とりわけ、磁器の陳列室を作った最初の男性たちのほとんどは、名声を高めるべく絢爛たる広間をもつ妻のいないカトリック教徒の君主とそれ以外の独身男性たちであった。

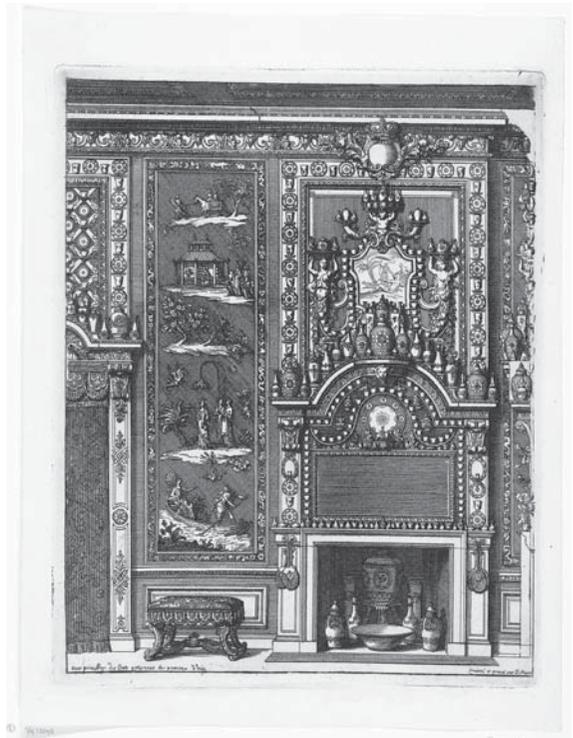


図3 ダニエル・マロによるシノワズリー様式のマンテルピース装飾図 (“Nouvelles Cheminées faites en plusieurs endroits de la Hollande et autres Provinces de du Dessein de D. Marot”より)、アムステルダム、1712年、エッチング・エングレービング、アムステルダム国立美術館、inv. no. RP-P-OB-6366

出典：アムステルダム国立美術館、パブリックドメイン

ザクセンの妃たちも磁器を崇める中国様式の部屋を所有したが、そのほとんどが知られていない⁷⁾。アウグスト強王の妻クリスティアーネ・エーベルハルディネは、アウグストがポーランド王となるためカトリックに改宗し息子にも改宗を強いたために、アウグストと仲たがいがした。彼女はドレスデンの居城に来ることを拒み、彼女の地所トルガウとプレッチュに主に暮らした。やむをえないときにかぎり、彼女は国王の妻の役割を演じ夫とともに公の場に現れた。一般的な不在のために、彼女は王家の宮廷婦人および女主人の役割をまっとうせず、彼女の大広間は格式高い社交の間として使われることはなかった。それゆえ、自身のふさわしい来賓室を作るというアウグストの熱望はほかの君主たちよりも際立ったのかもしれない。

日本宮殿は、アウグストの地位を明白にするための巨大な建設構想の一部を成した。1715年から、遊興の宮殿の新たな意味付けと設備に関するアウグストの着想が記された手書きリストが保存された。ドレスデンの周りに円を成して建つ24の城のために、彼はそれぞれに異なる機能と調和した室内装飾を構想した。狙いは、様式の体系的な差異化だった。彼はスペイン、フランス、イギリス、イタリア、トルコ、バルシャ、そして中国の調度品に明確に言及した⁸⁾。後期の建設過程をみると、いくつかの事業は実現されたが、必ずしもリストに挙げられた場所ではなかったといえる。事実、計画は常に変えられた。日本様式の城については言及されていない。この着想は1719年以降少しずつ進展したにすぎない。この時点で宮殿は「オランダ式」のみならず次第に「日本式」と呼ばれた。宮殿が磁器を展示したことを記録した1721年からのコレクション一覧表には、1万3,228の東洋の磁器の品目が記載された。1727年にその数は2万1,099に伸びた。最も重要な区分であることを示唆する一覧表の一行目では、3,636の日本の品が言及され、1727年にその数は5,558に上った⁹⁾。

日本の磁器は彩色された錦織風の伊万里焼きとして理解された¹⁰⁾。【図5】に対して青と白の磁器は中国の磁器を体現するものとみなされた。日本の磁器に割り当てる最終的な根拠は色彩と装飾で、実際の生産地ではなかった。そのため伊万里式の中国の器も同様に日本の区分に割り当てられ、一方でコバルトブルーの日本の焼き物と柿右衛門の器は日本の区分に割り当てられなかった。日本の区分はアウグストが所有した東アジアの陶磁器のうち4分の1を構成するにすぎなかったが、同時代人の目から見れば最も入手困難かつ貴重な磁器を表わした。当時は何



図4 アマリエンブルクの大厨房, 1734 - 39年, ニンフェンブルク/ミュンヘン
著者撮影

千もの品々を所有することが大きな話題だった。

各部屋に赤や緑、深い青、白など特定の配色をあてがうことで分類された設備は、多色彩色の磁器が宮殿における支配的なテーマと考えられたことをもほのめかす。【図6】保有する品の37パーセントを青と白の磁器が占めるにもかかわらず、それらのための部屋を用意しなかったことは建設計画から明らかである。その理由は2番目の城に見出される。その城はドレスデン近郊のピルニッツの夏の離宮で1720年代に中国宮殿として建設されていたはずだ。【図7】青と白の「典型的な中国」の磁器製品はすべてこの場所に移されていたはずだったが、1727年の後すぐにその計画は破棄された¹¹⁾。しかしトルコ様式の陶磁器は3番目のトルコ宮殿へ移された。



図5 伊万里式彩色皿、有田／日本、17世紀末または18世紀初頭、ドレスデン美術館・陶磁器コレクション、inv. no.PO 2974

出典：Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): *Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellan-sammlung Augusts des Starken.* München 2014, ill. 40

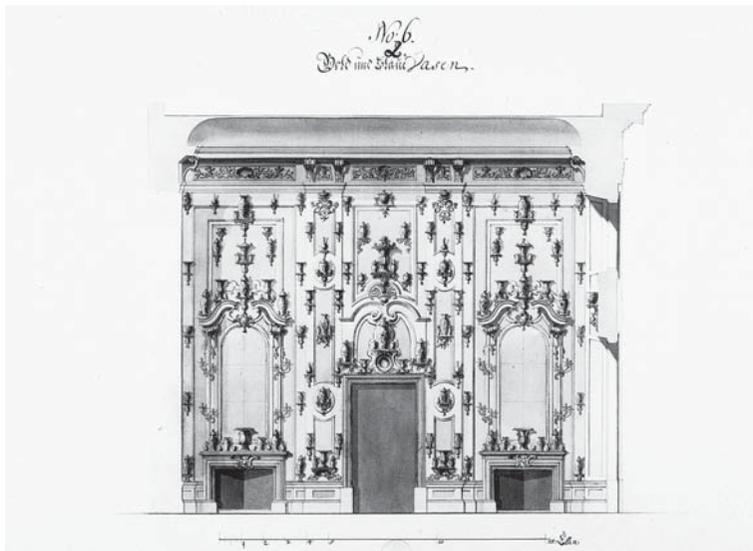


図6 ツァハリアス・ロングリューヌ、日本宮殿第6の間「金と青の飾り花瓶」のための設計図、1735年、ザクセン州立中央アーカイブ、ドレスデン、10006 Oberhofmarschallamt, P. Cap. II, Nr. 15, Bl. 26 f/3

出典：Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): *Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellan-sammlung Augusts des Starken.* München 2014, ill. 95

ドレスデンの「日本宮殿」(ビショッフ)



図7 ビルニッツ城・山の宮殿, 1720 - 24年

出典: Kolossos, Multi-license with GFDL and Creative Commons CC-BY-SA-2.5

当初から、「日本」の磁器を1階に、ヨーロッパの磁器を最上位の2階に展示することが目論まれた。そもそもヨーロッパ初の磁器製作所はアウグスト強王によってザクセンのマイセンに設立されている。製作所では1710年以来磁器を生産し、設立時から東アジアのデザインを模した。【図8】それにもかかわらず、1721年に日本宮殿で展示された1万4,513の陶磁器のうち、マイセン製作所のものはたった959品だった¹²⁾。琺瑯をかけて彩色するという日本様式の絵付けは、白と青の「中国式」彩色よりも、技巧的にさらに大きな難題だったためだ。1720年に絵付師ヨハン・グレゴリウス・ヘロルトが加わったことで、製作所はようやく日本の磁器の満足のいく複製品や改作物を作ることが可能となった。1723年の時点で、日本様式による多くのマイセンの器が提



図8 (左) つぼ, 中国・宜興, 1700年頃, せつ器 (右) つぼ, マイセン, 1710 - 12年, ベトガー陶磁器, ドレスデン美術館・陶磁器コレクション, inv. nos. PO 3971, PE 2313

出典: 佐藤直樹, コルドウラ・ビショッフ, ヴォルフガング・ホラー編『ドレスデン国立美術館展: 世界の鏡 カタログ篇』東京2005年 no. 137/138

供された。【図9】

宮殿で陳列されたマイセンの器の正確な数は不明だが、アジアの品をはるかに超える数だったにちがいない。1733年だけでも、3万5,798の品をマイセンの倉庫から運ぶよう要請された¹³⁾。ここにおいて輸入品を超えるという目標によりやく達したのである。

1700年頃、磁器コレクションに関しては間違いなくプロイセンの王宮がドイツの公国中で最も模範的とみなされていた。何世代にも渡るオランダ・オラニエ家との緊密な関係によって、ブランデンブルク家はシノワズリーの陳列室および中国磁器による調度の大家として名声を得た¹⁴⁾。【図10】中国よ



図9 伊万里式彩色皿, マイセン, 1740年頃, 磁器, アムステルダム国立美術館, inv. no. BK-17337-B
出典: アムステルダム国立美術館, パブリックドメイン



図10 シャルロッテンブルグ城(ベルリン)・プロイセン王国妃ゾフィー・シャルロッテの磁器陳列室, 1705年

出典: Hans-Joachim Giersberg / Jürgen Julier Jürgen: Preußische Königsschlösser in Berlin und Potsdam, Leipzig, 1992, p. 74

りも日本に注目するというアウグストの尽力は、このプロイセンとの争いを示している¹⁵⁾。中国という対象はすでに占拠されていた。そのためアウグストは独自になにか新しいものを作り出すという戦略を展開しなければならなかった。このことは彼が日本の磁器のみを収集あるいは展示したことを意味するのではないし、事実コレクション最大級の数の磁器は中国製だった。しかしながら関心は多色彩色の器に留まり、だからこそその生産地が中国や日本あるいはマイセンであろうとも日本的とみなされた。

日本宮殿の室内装飾の基本的な着想は、色彩で分類された設備にあった。これもまた、それまで優勢だった青と白による設備との大きな違いだった。ブランデンブルク家が青と白の中国の陶磁器およびオランダの陶器を含むシノワズリーの陶磁器をそのトレードマークにした一方で、ザクセンは色彩豊かな磁器でその権力を誇示しようとした。ブランデンブルク家とは対照的に、ザクセンが中国との直接的なかわりを持たなかったことは明らかだろう。しかし、ザクセンの者の何人かは17世紀にすでに日本を旅していた¹⁶⁾。たとえばドレスデンの著名な書記官であり、デッサン画家および商人でもあったツァハリアス・ヴァグナーは、東アジアを旅した最初のドイツ人であり、彼は南アメリカと日本で数年を過ごした。彼の自伝およびブラジルの人々と動物を彩色デッサンしたものの一部は、1668年の彼の死後以降アウグストの美術コレクションで保有され、今日ではドレスデン美術館に保存されている¹⁷⁾。ヴァグナーは日本からヨーロッパへの磁器の輸出に決定的な形で寄与したのである¹⁸⁾。

2人目に重要な旅行者は植物学者のゲオルク・マイスターであり、彼は400以上の植物の種を日本からドレスデンにもたらした。帰国後、彼は王宮庭師に任命された。1692年に彼はアジアの植物の解説を付した旅行体験記を出版した¹⁹⁾。今日においてもドレスデン版画素描館で、アウグストの治世ですでに大公コレクションとなっていた日本の地図やドローイングがみられる²⁰⁾。

ザクセンの特に色彩豊かな磁器の製造者としてのイメージ構築は、世間へと浸透していく。1744年の旅行記において、ドレスデンの描写がその完璧な磁器製造に関する批評から始まることは注目に値する。日本の磁器を上回るザクセンの磁器の色彩の鮮明さについて詳細な言及がなされている。

“Das auf den höchsten Gipffel der Vollkommenheit gebrachte Sächsisch-Meißnische und Dreßdnische Porcellain-Werck, so dem Japanischen am Wesen gleicht, an der Bildung aber es weit übertrifft, zeuget von so etwas ausserordentlichem, das Ost-Indien so wie China beständig vor unmöglich gehalten, und welches doch durch die ietziger Zeit so hoch gestiegene Emailen-Kunst, vermittelt deren die Farben mit Golde und Silber auf das schärfste eingebrannt werden, in die völlige Wirklichkeit versetzt werden.”²¹⁾

(訳：ザクセンのマイセン磁器およびドレスデンの磁器は成熟という絶頂期に達した。日本の磁器に似ているものの、成形においてはるかにそれを上回る。金と銀で色が強く焼き付けられる琺瑯着色の高度な技法によって、東インド会社や中国では実現不可能だった並外れた成果の実現を、これらの磁器は厳かに宣言する。)

当然ながらアウグスト強王はプロイセンの磁器陳列室を知っていた。1717年彼はブランデン

ブルク城から2000以上の器とピラミッド状に特別にデザインされた棚ひとつを購入しようと試みたが、フリードリヒ・ヴィルヘルム1世はこれらの品を手放さなかった。その代わりに、彼は151の非常に大きな器物を兵士や竜騎兵の連隊と引き換えに譲渡した。これがそれらのつぼがのちに「竜騎兵のつぼ」といわれる所以である²²⁾。

1730年頃、日本宮殿の内部装飾計画は再び変わるが、その内容を宮殿入口の計画図に見ることができる²³⁾。【図11】1731年のレリーフは、選帝侯の宝冠と紋章入り盾が特徴のザクセンの寓意を描いている。右手から磁器をもったヨーロッパ人が近づいている。彼らは、マイセンと思われる都市の擬人化を示す城壁冠をした女性に率いられている。左手では、アジア人の集団が船から降ろした輸入磁器を提示している。



図11 日本宮殿のティンパヌム、ベンヤミン・トマエ、1730年頃
著者撮影

ティンパヌムの下には加えてもう2つのレリーフが計画されたものの、実現には至っていない。【図12】ジャン・ド・ボッドによる設計図にレリーフの細部を見ることができる。ザクセン＝ポーランドの軍隊の左右に、磁器の絵付けと陶器の製造の寓意画が配置されたはずである²⁴⁾。人々のなかには王の都市宮殿でなく、磁器工場の入口にこのような描写を期待した者もいるだろう。

このような人目につきやすい場所、すなわち正面玄関の装飾部分にこうしたレリーフを取り付けることは非常にまれである。レリーフを取り付けていた場合、建築物が果たす中心的機能は外側からも一目瞭然だ。すなわち東アジアの磁器に対するマイセン磁器の勝利である。マイセン製作所の設立以来考えられていたと思われるこの着想は、1730年頃から実行に移せただろう。当時製作所は技巧的かつ美的にも信頼ある製品を大量に供給できた。アジアの磁器とヨーロッパの磁器を別々に配置する構想は順調にいき、全く新しい革新をもたらした。2階はマイセン磁器にのみ捧げられ、したがってマイセン磁器は1階のアジア磁器に対して象徴的な勝利を得たのである。

アウグスト強王の死後、息子のアウグスト3世は政策の実行を継続しマイセン磁器にその関心を集中させた。彼は、これまでにないほど宮殿をザクセンの磁器で飾りたてることを推し進めた。1733年11月、彼は3万5,000点以上を製作所の倉庫から選び出し、1734年には外部の注文を従属的に取り扱うよう命じた。そしてついに1735年、今後一切アジア様式で宮殿を設えることはしないとの決定が下った。2年のうちに、総合的なアジアの芸術品を創造するという狙いは、マイセン製作所の偉業を宣伝する試みに取って代わった。これが、中国の石鯀石彫像のあ

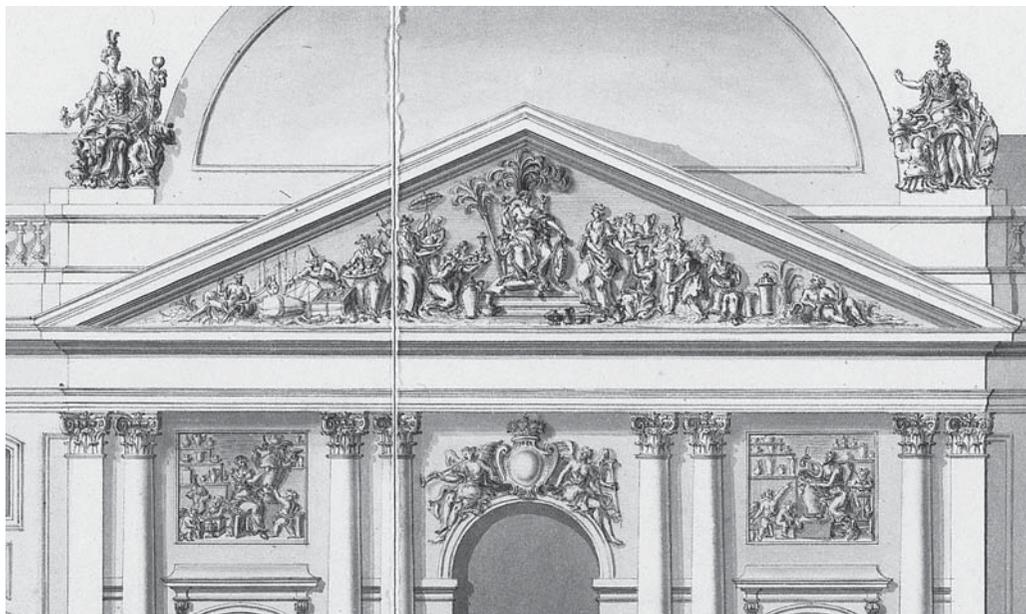


図 12 ジャン・ド・ボッド、柱廊意匠(部分)、1730年頃、インク画、ザクセン州立中央アーカイブ、ドレスデン、10006 Oberhofmarschallamt Cap. II, 16.9

出典：Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): *Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellan-sammlung Augusts des Starken*. München 2014, ill. 120

る陳列部屋や謁見食堂、漆の部屋といったアジアの特徴が消散した所以である。

素材としての磁器を技巧的に完全支配することで、すべてが手に入れられたかのようだ。当初アウグスト強王は、非常に多くの品によって感銘を与えようと欲した。技巧的可能性が増すにともない、素材の限界を調べつくすことも目的となった。この着想はアウグスト3世にも受け継がれた。いまや謁見室の磁器の王座や巨大な組み鐘、祭壇や磔刑像また使徒たちの等身大の胸像と磁器パイプ製オルガンで飾られた教会全体の内部装飾、そして公の場に据えられた等身大の騎士彫像と同様に、比類なき動物の彫像が計画された。磁器による大規模な彫像や調度品、建築彫刻の制作技術は新しい局面を提示したのである。

実行されては不在のもの、日本宮殿の展示室をフレスコの天井で装飾することが意図されていた。1735年または1737年頃の下絵では、3部構成の絵画についての描写がみられる。絵画中心には、一方に工芸品と製作所、他方にザクセンの天然資源と鉱物資源が描き加えられ、ザクセンの磁器の勝利が活写される予定だった。これによく似た図案を王室所有の1人乗りの箱型椅子かごにも見つけることができる²⁵⁾。前面パネルには、人文科学と自然科学の記事とともに商業の神マーキュリーと小さな天使たちが見られる。背面パネルは2つの絵に分かれている。上部では知恵の女神ミネルヴァが崇められている。下部にはザクセン選帝侯の領土とポーランド王国の擬人化が見られ、ザクセンが重視されていることは明らかだ。【図13】彼女の足元には磁器のつぼがいくつか置かれ、豊穡の角からたくさんの果物があふれている。ここでもまた、ザクセンのどの製品よりも磁器が最優先されているのだ。

この事実から、日本宮殿はその装飾によって、唯一無二という突出した強みをもつザクセン製品を喧伝するプロパガンダ要員であることを自ずから示している。初期近代の重商主義国家はみな、独特な特徴を有するぜいたく品の製造を重点的に取り扱うことに励んだ。他にはないという唯一さは、特定の地域に限られた珍しい生の素材や天然資源、あるいは地方特有の職人的技能に見出されたかもしれない。これらの品の多くは外交上の贈呈用だったが、意図的であり待望された副作用も持っていた。すなわち需要の高まりによって大量の消費が引き起こされたのである。

ヨーロッパの磁器考案で成功を取めたことによって、ザクセンは展示場などで提示され宣伝される価値のある商品を製造することが可能となった。大きな成功は戦略によって裏付けられたのである。数年のうちにマイセン磁器の評価は東洋の磁器の評価を凌駕した。とりわけダイニング用食器一式を製造

し始めて以来、いまやマイセンの器はその領域において模範となった。ほほどの王宮でも、ザクセンの王宮でも、1715年以降公的な食事とデザートは東洋の磁器の皿で給仕された。しかしドレスデンではすでに1717年から、食事に用いられるすべての皿は、銀や金の皿の代わりに、磁器のなかでも最も高価で貴重な日本の磁器の皿となっていた。このことは、ドレスデンがダイニング用食器に磁器を用いた最初の王宮のひとつであることを意味している²⁶⁾。マイセン製作所の設立時すでに、ヨーロッパ磁器の発案者であるフリードリヒ・ベトガーは、先見の明のある着想を追究していた。彼は、銀食器を模範として完璧な磁器食器一式を製造しようとした。しかしその時点での実現は技術的に不可能だった。

数年の間、彼らは中国の器よりもさらに需要のあった日本の器で間に合わせなければならなかったが、日本の器は貴重な金属で作られた食器類と同等にまでその地位を徐々に上げた。1728年ののち、製作所では完全なるマイセンの食器類を製造することが可能となり、それらはアジアの食器に取って代わった。これらアジアの食器は、ひとつの食器がヨーロッパの食器一式とともに置かれなければならなかったこと、また多くのヨーロッパの器に求められた形状にも乏しかったことから、不利な立場にあった。マイセン磁器は、どんな形や色でも、また調和



図13 椅子かご背面パネル、クリスティアン・ヴィルヘルム・エルンスト・ディートリヒ、1740年頃、ザクセン州立宮殿・城砦・庭園、モーリッツブルク城およびキジ小城、inv. no. 899/86

出典：Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, ill. 121

した一式でも製造することが可能だった。これがザクセンがマイセン磁器を外交上の贈呈品として用いた所以であり、これによって公的な祝宴にもマイセン磁器を使うという着想がさらに広まった。

以上をまとめるならば、日本宮殿が建設されるなかでシノワズリーの部屋を創るという50年もの女性的伝統が継続したと結論づけられる。アウグスト強王は、高まる傾向にならって、一連の部屋において常に拡大する磁器コレクションを設置した。同時に18世紀最初の10年間に、さらに多くの男性パトロンが中国風の建築物を建てた。アウグストは1715年によく磁器とそのほかアジアの品を大規模に収集し始め、当初はほかの品同様にそれらでもっていくつかの城や部屋を異なる様式でしつらえるようにするつもりだった。「アジア」という事柄は磁器と結びついた。さらに、それぞれ磁器の品は東アジア全体を表わした。マイセン工場がアジア製の磁器と確実に同じ品質で磁器を複製できることが明らかになったとき、アジアというテーマはザクセン選帝侯にとって最優先事項たる地位を獲得した。まずアウグストは莫大な量でもって感銘を与えようと欲した。次にプロイセンとの競争で、彼は「日本」というテーマを取り扱おうと試みた。最終的にマイセン磁器がヨーロッパ王宮での外交上の贈呈品という重要な役割を演じられるにまで高い品質の製品へと成熟したとき、アジアという事柄はザクセンの王宮でその重要性を失った。18世紀後半のシノワズリーの流行は、ザクセンでもほかのヨーロッパの王宮でも同様に庭園芸術へと移行したのである。

注

- 1) Jörg Jochen Berns: Zur Frühgeschichte des deutschen Musenhofes oder Duodez absolutismus als kulturelle Chance, in: Jörg Jochen Berns / Detlef Ignasiak (eds.): Frühneuzeitliche Hofkultur in Hessen und Thüringen. Jena 1993, 10-43 参照。
- 2) Dresdner Geschichtsverein e.V. (ed.): Dresden. Die Geschichte der Stadt von den Anfängen bis zur Gegenwart. Dresden 2002, 43.
- 3) 磁器コレクションと室内装飾については Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014 で大々的に論じられている。また調査プロジェクトに基づく建築史に関する新著が 近刊予定。
<https://tu-dresden.de/gsw/phil/ikm/kuge/forschung/forschungsprojekte/abgeschlossene-projekte/Das-Japanische-Palais>.
- 4) Cordula Bischoff: Spiegel-, Lack- oder Porzellankabinett? Der chinoise Sammlungsraum und seine Ausdifferenzierung, in: Kritische Berichte, 2, 2004, 15-23.
- 5) より詳細な内容は Cordula Bischoff: Women collectors and the rise of the porcelain cabinet, in: Jan van Campen / Titius Eliëns (eds.): Porcelains for the Dutch Golden Age. Zwolle 2014, 171-189 を参照。
- 6) イギリス・パラディオ建築信奉者である第3代シャフツベリ伯爵の1711年の声明。Dawn Jacobson: Chinoiserie. London 1999 [1993], 34.
- 7) Silke Herz: Porzellan im Besitz sächsischer Fürstinnen bis 1733, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 62-81 参照。
- 8) Cordula Bischoff: Die Schlossplanungen Augusts des Starken – eine Stichwortliste neu interpretiert, in: Peter Heinrich Jahn / Henrik Karge / Matthias Müller / Stephan Hoppe (eds.): Zwinger & Schloss – die Dresdner Residenz Augusts des Starken im europäischen Kontext (1694–173). Heidelberg University

- Press 2018/19 (出版予定)。
- 9) Elisabeth Schwarm: 'Das Inventarium über das Palais zu Alt-Dresden. Anno. 1721' und die Bestandsaufnahme der Porzellane und Kunstwerke im Holländischen Palais, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 102-111, 106.
 - 10) Elisabeth Schwarm: 'Das Inventarium über das Palais zu Alt-Dresden. Anno. 1721' und die Bestandsaufnahme der Porzellane und Kunstwerke im Holländischen Palais, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 102-111, 107.
 - 11) Désiree Baur: Die Ausstattung des Japanischen Palais ab 1727 – Konzeptionen für das Erdgeschoss und das Piano nobile, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 200-251, 207.
 - 12) Elisabeth Schwarm: 'Das Inventarium über das Palais zu Alt-Dresden. Anno. 1721' und die Bestandsaufnahme der Porzellane und Kunstwerke im Holländischen Palais, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 102-111, 106.
 - 13) Elisabeth Schwarm: Zeittafel zum Holländischen und Japanischen Palais, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 314-321, 320.
 - 14) Cordula Bischoff: Porzellansammlungspolitik im Hause Brandenburg, in: Guido Hinterkeuser / Jörg Meiner / Stiftung Preußische Schlösser und Gärten Berlin-Brandenburg (eds.): Aspekte der Kunst und Architektur in Berlin um 1700. Berlin 2002, 15-23.
 - 15) より詳細な内容は Cordula Bischoff: Die Porzellansammlungspolitik der sächsischen Kurfürst-Könige, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 287-299; Cordula Bischoff: Chinoiserie am sächsischen Hof – Mainstream oder Avantgarde?, in: Elisabeth Tiller (ed.): Bücherwelten – Raumwelten. Zirkulation von Wissen und Macht im Zeitalter des Barock. Köln / Weimar / Wien 2015, 307-334 参照。
 - 16) 加えて、ライプツィヒの外科医カスパー・シャンベルガー (1623 - 1706)、軍人で測量士のカスパー・シュマルカルデン (1617 - 1675 頃) の名もある。Herbert Bräutigam: Wettiner Lande in Kontakt mit Ostasien – Facetten eines Kennenlernens, in: Dresdner Geschichtsverein (ed.): Im Banne Ostasiens. Chinoiserie in Dresden. Dresdner Hefte, 96, 2008, 67-79.
 - 17) Kurtze Beschreibung / Der 35. Jährigen Reisen und Verrich= / tungen, welche Weyland / Herr / Zacharias Wagner / in Europa, Asia, Africa und America, / meistens zu Dienst der ost= und West= / Indianischen Compagnie in Holland, / rühmlichst gethan und abgeleget, / gezogen aus des seelig= gehalte=nen eigenhändigen Journal. また Wolfgang Michel: Zacharias Wagner und Japan (I) – ein Auszug aus dem Journal des 'Donnermanns', in: Dokufutsu Bungaku Kenkyu, 37, 1987, Kyushu University, 53-101 も参照のこと (オンライン出版は https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/2907/28.pdf を参照)。
 - 18) Herbert Bräutigam: Wettiner Lande in Kontakt mit Ostasien – Facetten eines Kennenlernens, in: Dresdner Geschichtsverein (ed.): Im Banne Ostasiens. Chinoiserie in Dresden. Dresdner Hefte, 96, 2008, 67-79, 71.
 - 19) Georg Meister: Der Orientalisch-Indianische Kunst- und Lust-Gärtner Dresden 1692.
 - 20) Cordula Bischoff: Die ostasiatischen Werke in Augusts des Starken Kupferstich-Sammlung: das Inventar von 1738, in: Jahrbuch der Staatlichen Kunstsammlungen Dresden, 36, 2010, 62-71.

- 21) Carl Christian Schramm: Neues Europäisches Historisches Reise-Lexicon, Worinnen Die merckwürdigsten Länder und Städte nach deren Lage, Alter, Benennung, Erbauung, Befestigung, Beschaffenheit, Geist- und Weltlichen Gebäuden, Gewerbe, Wahrzeichen und andern Sehenswürdigkeiten ... beschrieben werden ..., 2 vols. Leipzig 1744, vol. 1, lemma Dresden, col. 349-448, 351.
- 22) Elisabeth Schwarm: Die erste Ausstattung des Holländischen Palais, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 94-99, 96.
- 23) 以下も参照。 Cordula Bischoff: Die Porzellansammlungspolitik der sächsischen Kurfürst-Könige, in: Ulrich Pietsch / Cordula Bischoff (eds.): Japanisches Palais zu Dresden. Die Königliche Porzellansammlung Augusts des Starken. München 2014, 287-299.
- 24) Samuel Wittwer: Die Galerie der Meißener Tiere. Die Menagerie Augusts des Starken für das Japanische Palais in Dresden. München 2004, 36.
- 25) 椅子かご, 1740年頃, ザクセン州立宮殿・城砦・庭園, モーリッツブルク城およびキジ小城, inv. no.899/86. Harald Marx: Sehnsucht und Wirklichkeit – Malerei für Dresden im 18. Jahrhundert. Exh. Cat. Gemäldegalerie Alte Meister Dresden. Köln 2009, cat. no. 165.
- 26) 詳細は Elisabeth Schwarm: Tafeln am sächsisch-polnischen Hof. Böttgers “Unvorgreifliche Gedanken” für das Repertoire der Meißner Manufaktur – der frühe Gebrauch indianischer Porzellane auf dem fürstlichen Tisch, in: Jahrbuch der Staatlichen Schlösser, Burgen und Gärten Sachsen, 15, 2007/08, 28-42 参照。

